

上杉本「洛中洛外図屏風」の一部
・右上の近衛殿が新町校地に相当
・下半中央が室町幕府（花の御所）
・下辺の通りが烏丸小路
・右斜めの通りが毘沙門堂大路（上立売通）

桜ノ御所と 新町校地

鈴木重治

洛中洛外図屏風

天正二年（一五七四）織田信長が上杉謙信に贈ったという六曲二双の屏風がある。上杉本「洛中洛外図屏風」と呼ばれ、狩野永徳の筆になるものであって、重要文化財に指定されている。

この屏風は、中世末の代表的な障屏画の一つとしてよく知られており、天文八年（一五三九）以後永禄七年（一五六四）までの作品と考えられている。本年度の京都国立博物館春季特別展「京・近江の障壁二画」に出品され、多くの人に観察の機会が与えられた。図録などで見るのと違って、目近かに展開された実物の迫力には、否応なく圧倒され、くいつ入るようにつめ廻したものであった。屏風には、当時の洛中洛外に存在した神社・仏閣、公家・武家の邸宅に加えて、市中の繁栄ぶりが往来する多数の人物などによって詳細に画かれていて、祇園祭のにぎにぎしい山鉦巡行の様子さえ、楽しくうかがうことができる。画かれている建物や町割りの配置は、例えば一条堀川の戻橋、一条千本東の浄福寺、大将軍堂などの相互の位置関係をはじめ「一

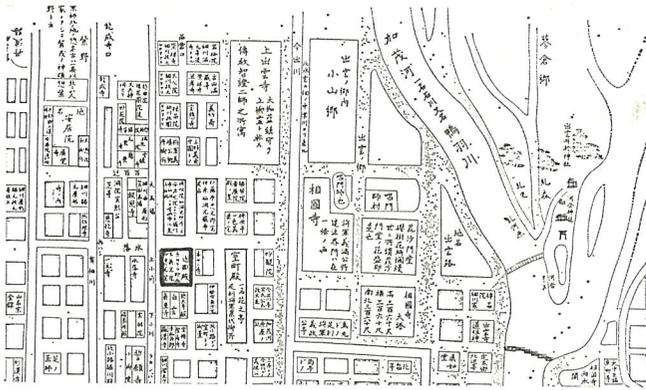
条風呂」として当時の庶民が好んで入湯したという風呂屋などを含めて、写実性をもっており、文献に合致するところが多く信頼にたるところとされている。

この屏風の左双第四、第五扇の下部には他を庄するかままで足利將軍邸が画かれ、脇に公方様と明記されている。將軍邸は、室町北小路（現在の今出川通）にあって、東西一丁、南北二丁を占めていて北は西大路（元毘沙門堂大路、現在の上立売通）に面している。屏風によると、將軍邸の右下、東北部に位置して相国寺の山門や法堂の瓦葺き伽藍が見える。三百六十尺に及んだという今は無き相国寺大塔からの鳥瞰を、屏風絵にしたのだという見方さえある。さしずめ、現在の位置からすれば、同志社の今出川キャンパス上空からの展望と思えばよい。

桜ノ御所と緑桜

屏風絵を詳細に観察すると、作者狩野永徳の配慮が心にくいばかりに伝わってくる。樹木の一本にさえ息吹きを感じるからである。近衛邸の桜が、これをよく物語っている。屏風には、將軍邸の西方、小川の東、上立売の

南に入江殿、近衛殿の屋敷が隣接していて、近衛邸には南北に並ぶ二棟の入母屋造りの他、老松や桜樹の植込をもつ庭園さえ画かれている。この桜は、一見して柳と見まがう樹形をしているが、花によって桜であることは



中古京師内外地図の一部

明瞭であって、糸桜¹俗に言うしだれ桜と認められる。この桜は、つとに知られていて「翰林五鳳集」に天龍寺一八六代住持江心承董の詩が収められている。室町時代のことである。ちなみにその詩を挙げて置く。



中昔京師地図の一部

近衛殿賞桜録
春人²庭桜³見⁴始奇⁵。
詠⁶和歌⁷又賦⁸唐詩⁹。
絲¹⁰々塔¹¹在¹²ス玉欄¹³ノ上¹⁴。
若¹⁵若¹⁶無¹⁷香¹⁸誤¹⁹柳²⁰枝²¹。²²

足利將軍邸を花ノ御所と呼んだ京雀が、近衛邸を桜ノ御所と呼ぶにふさわしい桜の銘木であり、屏風の作者狩野永徳もこのことを十分に知っていて、描写に加えたに違いない。後世に至っても絲桜のことは忘れられていない。京都叢書京都坊目誌上京第八学区之部の近衛殿表町の項には、名跡志からとして「此所北方に近衛殿の別業あり。古へ絲桜ありて貴賤之を賞す。」とみえ、「桜の御所は中古近衛殿の住せし所なり。」「維新後邸地畠地たりしが明治二十八年以来工業会社の工場となる。」と続けている。また同じ近衛殿別業ノ址の項には、「近衛殿表町北側にあり。世人桜ノ御所と呼ぶ。垂枝の桜樹を植らる。後ち皇宮地に移植す。今に残れり。」とある。ここにみえる工業会社とは、日本電池株式会社のことであり、昭和三十四年同志社が購入した現在の新町校地の前身に相当する。なお、日本電池の本社棟は、内部が改装されて臨光

館となりいままなお教室として使われている。

新町校地と発掘した堀跡

現在の同志社新町校地の地番は、上立売通りに面する育真館、知得館、新町別館のあたりが上京区西大路町六一の一であり、尋真館、臨光館、考古学展示室のあたりは、近衛殿表町一五九ノ一、深水館が近衛殿北口町二〇〇に属し、臨光館南側の民家に取り囲まれている運動部室群も近衛殿表町に属している。町名からもうかがえる様に、狩野永徳によって画かれた上杉本「洛中洛外図屏風」の近衛邸のあたりは、ほぼ新町校地に相当するようである。近衛殿の屋敷が存在したころとはすでに大きく様相が変り、書院造りの建物群もゆきかう京雀も、近代的なビルや全国から集る学生の波にとって代られている。これらの歴史的な変化は、新町界限だけのものではない。洛中洛外の土地利用の大きな変化は、絵画や文献などで跡付けることができて、地点ごとに実証するには困難を伴う。それぞれの地点について実証しようとするとき、考古学の方法による発掘調査が有効な手段の一つと考えられている。

新町校地を対象とした発掘調査は、昭和四十八年度に同志社大学校地学術調査委員会が新町別館の建築に先立って実施し、多くの遺構、遺物を検出している。出土した遺構のうち、室町時代の堀跡はその一部が新町別館の西側、小川児童公園との間に保存されており、常に見学することができる。当時の西大路に面した堀であって、東西に長く延びていたことが知得館地下の立合調査で追認されている。堀から出土した十五世紀代の陶磁器の中には中国からの輸入品も多く、地元で焼造した土師器とともに編年上の一つの基準を与えている。この堀は、出土状況や堆積状況から短期間に埋められたことが観察されていて、応仁の大乱（一四六七年）によるものと考えられた。堀によって確認されたこの地点は、中世の町割りを復元する上でも特定される遺構から重要な手がかりを与えており、発掘調査の成果の一部を示している。この堀の南側からは、建物の基礎や井戸のほか裏面に線刻のある硯、石製落款印刻、土製玩具、土鍋、土釜、銅銭（淳化元宝、皇宋通宝、熙寧元宝、元豐通宝、政和通宝、寛永通宝など）、塩壺を含めて生活遺跡に伴う多量の遺物が検

出されている。出土の資料に則してみると、このあたりは中世の後半、足利幕府の創設や相国寺の創建以後に急激に開けてきたことが理解される。奈良、平安時代に属する資料が少なく、室町時代以後の資料が圧倒的に多いことが、これをよく物語っている。将軍家を中心に武家や公家が集められ、邸宅群に伴う民家が増加したことであろう。高札の置かれた立売あたりの賑いが想像される。

発掘調査中、尋真館の西北の隈に鞍馬石の石碑が横たわっていたのが強く脳裡に焼き付いている。石碑には「旧近衛家邸宅址」とあり、近衛文磨の書になるものであった。洛中洛外図屏風にある裸足の庶民やいきいきとした町衆、供連れの武士や公家などと共に画かれた泉水のある庭園、これらにオーバラップしたジーパン姿の学生群や、シヨルダバッグの女子学生、近代建築の校舎群など、まさに時代の推移である。

新町校地に保存されている室町時代の堀の脇に、一本の絲桜を植えてはいかがなものだろうか。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）